

シュトルムの『ハンスとハインツ・キルヒ』

西野 雅二

岡山理科大学教養部

(1990年9月30日 受理)

はじめに

シュトルムの老年期の作品はほとんどが悲劇的な結末になっているが、ここで取りあげる作品『ハンスとハインツ・キルヒ』(Hans und Heinz Kirch)も、自分の息子を2度までも追放し、その結果として死に至らしめ、寂しく後悔の念を抱きながら余生を送る老人の姿をつづる悲劇である。本稿では、この作品の「悲劇」にいたる経緯を考察し、さらにシュトルムの他の作品にも言及することにより、主として「悲劇性」について論じることとする。

I.

物語の展開する場所はバルト海に面した小さな港町であり、ここに住む父親ハンスと息子ハインツの父子間の対立が基本的なテーマになっている。息子ハインツについては誕生から死まで、父親ハンスについては身を立ってから死に至るまでが描写されている。2度にわたって息子を突き放すという罪によって息子を死に追いやるという構図は、後で詳述するように、「父親の罪によって死ぬ (Culpa Patris Aquis Submersus)」¹⁾という『水に沈む』(Aquis Submersus)のテーマの再現と言える。

さて、それでは父親ハンスは何故に2度もこのような罪を犯さなければならなかったのであろうか。ここでは先ず、こうした罪を犯すもととなっているハンスの性格と、最初の父子間の対立について見ることにする。

この港町の教会には、一般席とは別に「船主席 (Schifferstuhl)」²⁾があり、いつかはそこに座りたいというのが若い船員たちの希望である。ここには船乗り試験に合格し、自分の船を持っている者のみが座れるのである。

主人公のハンスは、不断の努力と儉約でもって、他人の船に乗る雇われ船員の身を経て、自分の小さなヨットを持つ船主になり、教会の船主席に座れるようになっている。ハンスは、他の船乗りたちが仕事を休むような晩冬の厳しい時期にも仕事を続けるし、さらには、春の訪れのかかり前にも海へ出る。また、妻には牛や豚の面倒を見させるなどの勤勉さにより、家業を拡大させる。このハンスには急に怒りだすという「短気」があり、ハンスの望みを知っている妻はそれに対する恐れもあって食べ物を節約し、儉約につとめる。

ハンスにとっては、勤労と儉約こそが、いずれは市参事会員などの名誉ある公職につきたいという望み、名誉欲をかなえてくれるものなのである。こうしたことから、ハンスは子どもをも徹底した儉約でもって育てる。妻が平日に子どもに菓子を買って与えた時には、ハンスは「またむだ遣いをしたな。(All wedder'n Dreeling umsünst utgeb'n!)」³⁾と怒る。このケチとも言えるほどの儉約ぶりは、牧師が開いている塾にハインツを入れるように勧められた際に謝金をねぎろうとするところにもあらわれている。

ハインツは6才の誕生を迎えて後すぐに、父ハンスに連れられて船に乗る。ハインツは船首にすわり、歌を歌っている。風次第ではいつ海のなかに落ちてもおかしくないような状態にあり、ハンスは息子の身を案じるが、連れ戻すことが出来ないでいるうちに、子供が自分から戻ってくる。息子の安全を願っていた父親の心痛は怒りにかわる。ハインツには「もう2度とするな！(Heinz, Heinz, das tust du mir nicht wieder!)」⁴⁾と脅すような感じの口調でたしなめ、ちょうどその場に通りかかった若い船員に怒りをぶつける。この時、息子のハインツの心の中には父親に対する恐れと、憤慨の気持ちが芽生える。これが、父と子供の間で生じた最初の亀裂である。そして、ハインツに独立心が芽生えてくるにつれて、ハンスの息子に対する愛の気持ちがうすらぎ、息子を自分の生涯計画を達成するためのものとしてしか見ないようになる。

II.

ヴィープは海と丘の両方に亭主をもつといわれる洗濯婦の娘である。ハインツはこのヴィープに心を傾ける。ハインツが17才の誕生を迎えて後、1年間の航海に出ることになる。その出発の前の日の夕方、ハインツはヴィープを誘いだし、年の市が開かれている島の村へボートで出かける。そこで2人はなげなしの金でリングを買う。そのリングをヴィープは紐をつけたうえでハインツの首にかけてやる。この後、家に戻ってきたハインツは、家から締め出されてしまう。すなわち、10時を告げる「市民の鐘(Bürgerglocke)」⁵⁾はとっくに鳴ってしまっており、家には鍵がかけられてある。

「市民の鐘」は何世紀も前からあるみたいではあるが、設置されてからまだ日が浅いものである。夕方10時、教会の鐘が鳴ったすぐ後に鳴らされるもので、この鐘を合図にそれぞれの家の入口が閉じられるのである。この鐘が鳴らされると家に帰らなければならないのであり、これは当時の市民生活の一つの規範となっているのである。

床についていた父ハンスは起きだしてハインツを中に入れるが、ハインツをしっかりとつけ、鍵で頭を殴りつける。ハンスは、「もう2度とこんなふうにして家の戸を叩くな！開けてはやらんぞ。(Klopf nicht noch einmal so an deines Vaters Tür! Sie könnte dir verschlossen bleiben.)」⁶⁾と怒りをあらわにする。これは、ただ単に寝ているところを起こされたからというのではなく、ハインツが「市民の鐘」を無視した、すなわち市民たるにふさわしくない行動をしているのであり、自分の計画の障害になるものであると考えて

いるからだと言える。自分は市参事会員になりたいし、息子には市元老にまでなってもらいたいから、したがって息子はそれにふさわしいように、市民として健全であらねばならず、市民生活の規範としての「市民の鐘」に従うべきなのである。

息子の出航後、ハンスの姉ユーレが町中のうわさ話をハンスに伝える。出発の前夜、ハインツが遅く戻ってきたのはヴィープと会っていたからだというのがそのうわさ話である。ちょうど参事会員の席が一つあいたが、自分とはそれまでは同格であり、財力などの面でも比肩する人物がこれに選ばれ、ハンスは気分が悪い。こうした時に、ヴィープとハインツのうわさ話を聞くのだが、参事会員になろうと考えていたハンスにとっては、家柄の悪いヴィープと息子のゴシップは誠にもって都合が悪い。このために選ばれなかったのかも知れないのである。ユーレは、「新しい親戚関係のためには、お前さんが参事会員にならなかったのは本当にいいことだね。(...für die neue Verwandschaft ist's doch so am besten, daß du nicht auf den Ratsherrnstuhl hinaufgekommen bist.)」⁷⁾とハンスをあざける。怒ったハンスは、ハインツにあてて手紙を書く。この中身は作品では記されてはいないが、ヴィープとの交際を許さないという決意に満ちているものであろう。これに対して、ハインツからは返事がないし、航海が終わって船が戻ってきてもハインツは帰っては来ない。

Ⅲ.

ハインツからの手紙を心待ちにしているハンスのもとに、2年後になってようやく手紙が届くが、それには切手が貼られていない。手ぶらでは帰ってはこないだろうと思っていた息子が、手紙に切手を貼れないのである。ハンスはこの手紙の受け取りを拒否する。郵便料金の30シリングを惜しんでというよりも、むしろ30シリングの料金を払えないほどに窮している息子が自分の家にはふさわしくないと考えたからであろう。参事会員、ひいては元老会員を目指す資格がないと考えての怒りから、息子を突き放してしまうのである。これが、ハンスが息子のハインツに対して犯した2つの大きな罪の先ず一つ目のものである。

親子げんかであればその関係の修復は可能であろうし、また親の一方的な叱責であっても、この場合のようにたとえ2年という年月がかかるにしても歩みよりが出来るのである。しかしながら、ここにおいてのハンスの態度は息子を「無視」しているのであり、もはや2人間の関係は取り繕いがたくなってしまふ。後になってからハインツから語られるが、受け取り拒否にあって自分のところに戻ってきた手紙を手にしたハインツは、こういうことがなければ家にいずれは帰ったであろうとのことである。

さらに15年後、「市民の鐘」は以前と同様になりひびいていると、作者シュトルムは書くが、これはすなわち、市民社会に大した変化がない、そして市民の意識、ひいてはハンスの意識にも以前と変わりが無いということの象徴的な事柄であると言える。ハンスの名

誉欲は娘婿のクリスチャン・マルテンスが具体化しようとし、努力を積み重ねて声望のある市民のみが入会出来る社交団体の一員になることが出来る。

こうした中であって、ハインツがハンブルクにいるとの情報がはいる。ユーレは、「連中は30グルデンでキリスト様を裏切ったけれども、お前さんもそのようにして自分の身内を30シリングで追い払ったんだ。(Ei nun, für dreißig Reichsgulden haben sie unsern Herrn Christus verraten, so konntest du dein Fleisch und Blut auch wohl um dreißig Schillinge verstoßen.)」⁹⁾と非難しながらも、見つかったというハインツを連れ戻しに出かけるようにとハンスを説得する。

これは作者シュトルム自身の体験を思い起こさせる。すなわち、この作品の素材の一つとして、シュトルムと長男ハンスの関係が挙げられる。ハンスはアルコールにおぼれ、11年間にわたって学生生活を過ごすなど自堕落な有様はシュトルムを大いに心配させたようである。ハンスは医士試験に合格し、ハイリゲンハーフェンで医者職につきはしたが、アルコールのために健康を害し、医者としての名誉もなくしてしまう。シュトルムの息子を思う気持ちはあわれみから怒りにかわり、自分の罪ゆえであろうかと嘆く。1880年にはシュトルム自身がこのハンスをハンブルクへ連れ戻しに行っているのである⁹⁾。

この連れて戻してきた男がハインツではなく、よく似ている貧民の出のハッセルフリックだとのうわさが町中に広まる。年が離れて育った妹のリーナは、町のうわさを聞き、さらには兄の腕にあったという錨のいれずみや痘こんが見あたらないことから、本当の兄ではないのではないかとの疑問をいだき、気味悪がる。ハンス自身も、本当に自分の息子なのかどうかという疑問を抱くが、2人の言い争いの中で、受け取り拒否にあった手紙の返送を受けたと語る男が、自分の本当の息子のハインツであると考えざるを得ないはずであるのに、追い出すことになる。

ハンスにとっては、本当の息子であれ、にせものであれ、自分がこのような形で町中のゴシップの種をかかえていることは受け入れることの出来ないことである。また、ハインツは2人の言い争いのあとで家を出て、翌日の午前になってようやく酒を飲んで戻ってきているが、これは「市民の鐘」を無視してあまりある行為であり、市民としてはふさわしくない、自分の息子としてふさわしくないのである。ハンスは封筒の中かなりの額の金をいわば手切れ金という形で入れて、ハインツの部屋におく。ここにおいて2度目の追放劇、ハンスの2つ目の罪が成立することになる。

後にハインツの幼なじみのヴィープがハンスの所へやってきて、あれは本物のハインツだったと告げるが、ハンスは、「わしのハインツは17年前にわしのもとを去っていった。(mein Heinz hat schon vor siebzehn Jahren mich verlassen.)」¹⁰⁾とかたくなな態度をとる。

この2度の追放劇の背景には、ハンスの抱いている理想と現実のギャップがある。他人の持ち船に乗って働く船員から、自分の船を持つようになり、業務の拡大に努めているハ

ンスの理想は、自分が市参事会員になることであり、さらには息子のハインツを「船主席」に座れるようにさせるとともに、自分はだめであっても息子には元老会員にまでさせてやりたいということである。儉約と精励によって少しずつ昇りつめる、いわゆる小市民としての名誉欲、これがハンスの人生設計であり理想なのであるが、ハンスの見る現実、自分の理想の障害となる息子ハインツの姿である。

IV.

ハインツが去って1年後、あらしの夜にハンスはなかなか寝つかれず、自分の寝室の中であらしにもまれる船、そして水にぬれた男の姿を見る。マストの折れた船が高い波のなかで木の葉のようになっているのがはっきりと見え、ハンスの部屋の一角には顔は見えないが頭をうなだれ、髪から水をしたたらせている男がいる。ハンスにはそれが息子のハインツだとわかる。服からも腕からも水が落ち、幅広い流れとなってハンスのベッドの方へと向かってくる。

夢を見たのだという娘婿の言葉に対してハンスは、「船乗りはこんなふうにして自分の死を告げにくるんだ。(Du bist kein Seemann, Christian; was weißt du davon! ... Aber ich weiß es, so kommen unsere Toten.)」¹¹⁾と言う。ハインツが自分の死を告げに来たのであり、ハンスはハインツが死んだと考える。

作者シュトルムはここで読者にハインツの溺死を予感させるのであるが、このようにシュトルムの作品における登場人物の死は、ほとんどすべてが直接的・間接的に「水」と結びつけられている¹²⁾。『大学時代』(Auf der Universität)のローレの入水自殺、『シュターツホーフにて』(Auf dem Staatshof)のシュターツホーフ家の男系としては最後の一人にあたる男子の落馬後、井戸に落ちての溺死などがあげられるし、『水に沈む』では、画家になっているヨハネスが以前に恋仲であったカタリーナと再会している間に、2人の子供が溺死している。さらに、北の海に押し寄せてくる洪水は、シュトルムにとっては死をもたらすものとなる。『後見人カルステン』(Carsten Curator)ではハインリッヒが大洪水の夜行方不明になるし、『白馬の騎者』(Der Schimmelreiter)では、嵐の夜に堤防を見回っている堤防監督官である夫ハウケの身を案じた妻子が、決壊した堤防を乗り越えて入ってくる水に飲み込まれ、それを見たハウケも自ら馬とともに水の中に飛び込んでいる。

V.

息子ハインツの死を感じるというこの体験がきっかけになったのであろうか、ハンスは卒中になるが、良くなって外出できるようになると、海に沈んだハインツを捜そうとでもするかのごとく、娘のリーナを伴って岸辺の道を散歩する。そして、ハインツを2度目に追い出してから2年、ヴィープを伴って岸辺にいる。以前はハインツにはふさわしくない

と思われていたヴィープであるが、ハインツがいなくなってしまった今となつては、ハンスは、「わしの生きていくかぎりそばにいておくれ、その後もな。遺言に書いておいたよ。(… bleibst du auch bei mir, solange ich lebe; und auch nachher — ich habe in meinem Testament das festgemacht.)」¹³⁾と頼むほどに変化している。自分の息子を2度までも追放し、死に追いやったハンスは、「永遠なる所でハインツをきつとまた見つけることにするよ。(… in der Ewigkeit, da will ich meinen Heinz schon wiederkennen.)」¹⁴⁾と語るが、この時のハンスを支えて町に戻るヴィープの目には「穏やかな光 (ein milder Strahl)」¹⁵⁾が輝いている。これは、あらゆることをなぐさめるような、この上なく慈悲深い愛のこもった女性のまなざしであり、ハンスはこれに見守られて、いわば一種の救いを得ていると言うことができる。

さらに、ハンス自身は悲惨な死を遂げるのではなく、ヴィープに見守られての穏やかな死になっていると考えられる。また、ハンスの起こした事業は、娘婿の手に委ねられて後、最良の状態にあるし、町の人たちから「金持ちの」クリスチャン・マルテンスと言われるように、声望も高くなり、市参事になるのもそう遠くはない。このような点において、作品の最後において悲劇性が薄められており、読者にいくばくかの安心感を与えるものとなっていて、この作品は完全な形での悲劇にはなっていないと言うことができる。

Franz Stuckertは、『ハンスとハインツ・キルヒ』や『後見人カルステン』に関して、シュトルムが狭量な市民的なモラル、規範にとらわれていないから、個人的な問題、とりわけ父と子の関係を迷うことのない客観さでもって書き表し、悲劇的な結末へと導くことができたとし¹⁶⁾、さらには、結末の固さをやわらげることによって悲劇性がその核心においてうすらいだり、なくなったりはしないと述べている¹⁷⁾。しかし、これらの作品と、シュトルムの最後の作品である『白馬の騎者』とを比較してみた場合、悲劇性の度合いの違いが認められ得る。

『後見人カルステン』においても『ハンスとハインツ・キルヒ』と同じように父子関係が主要なテーマになっている。財産管理を職業とするカルステンは依頼主のユリアーネと結婚するが、ユリアーネはハインリッヒを産むとすぐに死亡する。長じたハインリッヒは、カルステンを後見人とするアンナと結ばれるが、事業に失敗する。嵐の荒れ狂う日に、ハインリッヒは酒に酔いながら、破産をまぬがれるために父に助けをもとめる。父に拒絶されたハインリッヒは洪水に飲み込まれてしまうし、カルステンはこの息子とともに自分自身の財産も失ってしまう。洪水はこのようにカルステン一家に悲劇をもたらすが、この作品はこうした悲劇で終わってはいないのである。

ハインリッヒの妻アンナは年をとって容色がおとろえてはいるが、いまだに美しい金髪を保っており、以前にはなかったことだが、「彼女の顔からは精神的な美しさが輝いている。(… aber eine geistige Schönheit leuchtete jetzt von ihrem Antlitz, die sie früher nicht besessen hatte.)」¹⁸⁾。そして、自分の子どもと子どもに戻ってしまった老人

カルステンを左右両側に連れたアンナを見る人は、「肉体が滅んでも、魂は生き続けるだろう。(Stirb auch der Leib, doch wird die Seele leben!)」¹⁹⁾という聖書の言葉を思い出さざるをえない。カルステンは悲劇を体験したあとに、このようにしてアンナと孫に囲まれ、穏やかに過ごしている。アンナの「精神的な美しさ」の輝きがカルステンをやさしく包み込み、カルステンに救いを与えているのである。

以上で見てきた『ハンスとハインツ・キルヒ』や『後見人カルステン』とは違い、『白馬の騎者』では作品の結末においてこそ、その悲劇性が徹底する。この主人公であるハウケは、農作業などをするかたわら土地の測量をしたり、計算をしたりする。向学心に富むハウケは家の中にある幾何学の本で勉強したり、また堤防に打ち寄せる波を観察したりすることによって、堤防の欠陥に気付く。堤防監督官のもとで働くようになったハウケは、その死後に娘のエルケと結婚する。この新しい監督官のために堤防修理の仕事が多くなった村人たちは不満をいだが、妻のおかげで監督官になれたと思われたくないハウケは、自分が考案した新しい堤防を築く。大嵐の夜、堤防を見回っているハウケの足元で決壊が生じる。ハウケの身を案じて馬車に乗ってやってくる妻子が水に飲み込まれるのをみたハウケは、白馬とともに決壊したところに飛び込み、命を断つ²⁰⁾。

この作品は努力によって堤防監督官にまで出世し、さらに自分の職務を忠実に遂行する人物を描いた教養小説の形をとっているが、既に述べたように、作品の結末において悲劇的なシーンを迎えるのであり、ここには「穏やかな光」も「精心的な美しさの輝き」もありはしない。作者シュトルムは、ここにおいてこの作品を完全な悲劇として組み立てていると言える。

おわりに

ハンスやカルステンを現実のシュトルムと重ねてみた場合、シュトルム自身が悲劇の主人公になりきってはならず、どこかで自分を救いたいという気持ちが、作品の悲劇性を薄めているのである。これに対して、『白馬の騎者』を執筆中のシュトルムは、ガンであると医者から診断されるが、他の人々のにせの診断により気持ちをとりなおして執筆を続けている。しかし、この診断を信じたかどうかは別にしても、シュトルムが自分の死について考え、さらには死期を感じ取っていたと考えられる。こうしたシュトルムにとっては、もはや悲劇性を和らげる必要はないのである。

『白馬の騎者』はシュトルムが仕上げた最後の作品であり、シュトルム自身の作家生涯の集大成とも言えるものであるが、本稿で主にみてきた『ハンスとハインツ・キルヒ』は『後見人カルステン』などとともに、シュトルムが完全な悲劇性を備えた作品を書くにいたる前触れとなるものである。

(テキスト)

Theodor Storm: Sämtliche Werke in zwei Bänden, München 1977.

注をつけるにあたっては、このテキストからの引用は巻数とページ数のみを示す。

(注)

- 1) Bd. 1, S. 1013.
- 2) Bd. 2, S. 162.
- 3) Bd. 2, S. 163.
- 4) Bd. 2, S. 165.
- 5) Bd. 2, S. 161. S. 174.
- 6) Bd. 2, S. 174.
- 7) Bd. 2, S. 177.
- 8) Bd. 2, S. 189.
- 9) この件に関してはさまざまに書かれているが、ここでは以下を参照した。Karl Ernst Laage (hrsg): Theodor Storm; Im Sonnenschein, Hans und Heinz Kirch. S. 106ff.
- 10) Bd. 2, S. 220.
- 11) Bd. 2, S. 223.
- 12) この点については、西野雅二『テオドア・シュトルムの作品における「水」の役割』, 岡山理科大学紀要第18号 (1983), 11-19ページで詳述している。
- 13) Bd. 2, S. 225.
- 14) Bd. 2, S. 227.
- 15) Bd. 2, S. 227.
- 16) Franz Stuckert: Theodor Storm, der Dichter in seinem Werk, Tübingen 1966, S. 117.
- 17) F. Stuckert, S. 122.
- 18) Bd. 1, S. 1077.
- 19) Bd. 1, S. 1077.
- 20) 西野雅二『テオドア・シュトルムの「白馬の騎者」について』, 日本独文学会中四国支部編ドイツ文学論集第15号 (1982), 9-16ページ参照。

Theodor Storms “Hans und Heinz Kirch”

Masaji NISHINO

*Abteilung der Allgemeinen Bildung von
der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama
1-1 Ridai-cho, Okayama 700 Japan*

(Am 30. September, 1990 empfangen)

In seiner Spätzeit schrieb Theodor Storm tragische Schicksalsnovellen. Dieser Aufsatz behandelt eine davon, “Hans und Heinz Kirch”.

Storm mildert die Härte des Endes dieser Novelle, indem er ‘einen Strahl jener allbarmherzigen Frauenliebe’ leuchten läßt. Dadurch wird die Tragik dieser Novelle ein wenig gemildert. Dergleichen sieht man auch an “Carsten Curator”. Aber Storms letzte Novelle “Der Schimmelreiter” hat keine solche Milderung der Härte des Endes. “Hans und Heinz Kirch” und “Carsten Curator” bereiten sich auf die echte Tragik des “Schimmelreiters” vor.